外国語学習に関する自己分析と動機の研究（2）

－学力別観点からの英米文学科新入生の新たな実像－

藤　澤　良　行
小　森　道　彦

1　はじめに

本稿は『大阪樟蔭女子大学論集』第 39 号（2002 年 3 月）に発表した「外国語学習に関する自己分析と動機の研究－学力別観点からの英米文学科入学生の実像」の続編にあたる。先の研究は 2001 年度Ｓ女子大学英米文学科入学生を調査対象として、彼らの入学動機に関する調査をまとめたものである。本研究はその 4 年後に、再び同学科入学生に対して行った調査結果に基づいて考察を行うものである。2001 年度の調査と同じフォーマットを使用したので、さまざまな点において比較対照が可能である。

高校生の英米文学科離れの志向は年々強まりつつある。またこの傾向に対応して、「英文科」「英米文学科」など旧来の学科名称から、さまざまなバラエティをもたせた学科名に改称した大学が一段と増加した。（S 女子大学近隣の大学の中で 2005 年度構想中のものも含めて例を挙げれば、梅花女子大学の文学部英米文学科が文化表現学部国際英語学科に、神戸海星女子学院大学の文学部英語英米文学科が同学部国際英語メディア学科に変わり、就実女子大学は共学になり英文学科は実践英語学科という名称になった。大谷女子大学は英語関係は文学部英米語学科という名称になっているが、大学名そのものも大阪大谷大学と変え共学化されることになった。）もはやこの流れは止めようがないのかもしれない。

このような流れの中で、英米文学科を選択する学生がどんな目標や学習動機を持っているのかを把握しておくことがますます重要となる。そのためには、まずどのようなタイプの学生が進学してくるのかを再確認する必要がある。

2　英語学習動機の研究動向

言語学習における動機づけ研究に関しては、藤澤・小森（2002）でも触れたように、Gardner and Lambert（1972）をもって嚆矢とする。彼らは学習者のもつ動機の特徴を「統合的動機づけ（integrative motivation）」と「道具的動機づけ （instrumental motivation）」の二元的なとらえ方に分類した。その後日本での学習動機付け研究において、市川 (1995) は 6 種類の学習動機（充実志向、訓練志向、実用志向、関係志向、賞賛志向、報酬志向）を 2 要因（学習内容の重要性、賞罰に直接性それぞれの大小に分ける）に分けてモデル化している。

外国語に関して、これまでの調査は中・高生の学習動機研究が中心であったが、最近ようやく調査対象としての大学生という存在が注目されはじめた。これは入試を経験した大学生の学習意

欲をどう捉えればよいのかという反省と、習熟度別クラス編成など大学の授業運営上の様々な変化に対応する必要から始まった研究だと考えられる。

先行の動機研究のうちで因子分析を中心とした主なものをあげておく。藤澤・小森（2002）が５因子（寄与率の大きいものから順に並べると、「f1：教養志向」「f2：海外交流志向」「f3：お勉強志向」「f4：耳口志向」「f5：教師志向」）を抽出した（2005 年度の結果は後節で述べる）。他には、八島智子（2000）が 9 因子（「異文化友好」「旅行」「英米文化への興味」「教科としての重要性」「道具的動機」「国際的職業への興味」「英米音楽への興味」「漠然とした必要性の認知」「情報の入手と発信」）を挙げる。また島村恭輔（2001）はほぼ 4 因子として、「受信型学習志向、双方型学習志向、一般的学習志向、個人的学習志向の混在したもの」「本質的学習志向」「消極的学習志向」「実利的学習志向」と分類している。また中田賀之（2001）は 4 因子（「コミュニケーションのための内発的動機」「道具的目的の英語学習に対する否定的認識」「学習不安」「自己効力感」）を挙げる。さらに柳田恵美子他 （2004）は大学生の英語学習動機の変化を 1988 年度と 2000 年度の学生調査を元に比較する。中心となる因子とは「言語と人々に対する態度」「統合的動機」「外国への居住」「受信型・発信型動機」「道具的・興味的動機」の 5 因子で年度間の相関を調べている。以上の各研究において因子の数や名称が異なるのは、調査項目や内容がそれぞれ異なることが原因である。

その他の動機研究としては、吉田広毅他（2002）がＫＪ法による 14 項目（「外国人と会話ができるようになりたいので」「コミュニケーション手段のひとつとして英語を使えるようになりたいので」「英語が使えると交流の輪が広がると思うので」「海外に旅行などでいってみたいので」「英語が好きなので」「英語の本や映画、ホームページを見たいので」「他国の文化を理解したいと思うので」「英語ができるとかっこいいと思うので」「英語は現在、世界で最も使われている言語なので」「英語が使えると何かと便利だと思うので」「仕事で英語を使うことになると思うので」「国際化の進展にともない、英語が必要になっているので」「英語ができると、就職の時に有利だと思うので」「英語は必修科目なので」）に分類している。また上田敦子（2004）は質問用紙を使って自由記述による分類をしていて、一年間での英語学習に対するやる気・興味と成績（自己評価）の動向を調べている。さらに千葉克裕（2003）は短期大学英語科入学生の学習履歴、および在学１年を経過しての動向を「好き・嫌い」を中心に調査している。

日本の教育環境で、大学入試という最大の動機を生み出すハードルを経てきた大学生を調査対象とした英語学習動機研究は今後も継続される必要があろう。

3　本研究の目的

１節に述べたように、英語学習動機の変化として、実践的な英語運用能力に重要性を感じている学生が以前よりさらに増加傾向にあるように見える。本稿の目的は、このように実用志向が強まりつつある英米文学科入学生の英語学習観および英語学習動機の現状を、統計による分析を用いて客観的に把握することである。それと同時に、先に行った 2001 年度入学生とのデータ比較により、どのような変化の傾向が浮かび上がっているかを明らかにする。

4　調査方法

(1) 被験者

S女子大学英米文学科1回生69名（全員）を調査対象とした。調査用紙に関しては回収できたもの67名分を基礎データとした。

(2) 学力テスト

入学生に対して2005年4月4日に「(財) 日本英語検定協会英語能力判定テスト（テストB)」[1]を実施した。結果は表1の通りで、これを母集団として総得点に従い上位群・中位群・下位群それぞれ23名ずつの三群に分けて考察する。

表1　三群別テスト結果

	上位群	中位群	下位群	全体
平均	449.09	382.30	338.13	389.84
標準偏差	38.40	9.45	22.63	52.75
最小	406	372	266	266
最大	529	403	369	529
標本数	23	23	23	69

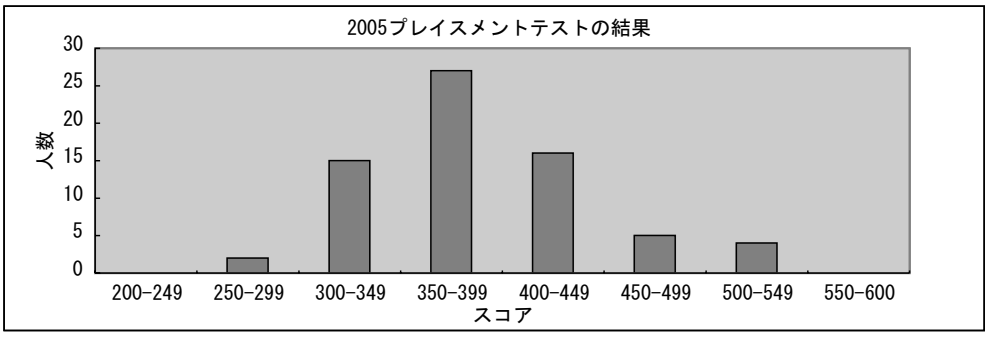

図1　得点分布図

全体の得点分布は図1のようになる。中央値が平均値より下に表れており、全体としては正規分布より得点の低い側にグラフの山が偏っている。したがって中位群と下位群の差があまり出ない結果になることが予測される。

(3) 調査用紙

学力テストから1週間後の授業時間に、個人別学習履歴調査も含めた形でアンケートを実施した（Appendix 参照)。母集団を学力テストの成績別に三群に分けることを前提に記名式とした。アンケートには個人の学習履歴、現時点での英語力に対する自己分析や学習動機などを調査する項目があり、自由記述と5～1の5点法による評定基準で回答する形式を併用した。調査項目に関しては、データ比較をする上からも藤澤・小森（2002）と同一のものを使用した。

本調査が個人データの蓄積にもなり、学習動機研究にも活用することを調査用紙冒頭に記し、

調査時にも被験者に口頭で改めて説明した後で記入してもらった。本稿では、この調査項目のうち自己分析と英語学習動機に関する部分を使用している。

(4) 分析方法

数値の統計処理については、Excel X for Mac および SPSS for Windows (Version 13) を使用した[2]。

5　自己分析に関して

藤澤・小森（2002）と同様に、自己分析の結果を学力テストの成績の上位群・中位群・下位群の三群に分類して考察する。

自己分析については、英語学力を reading, listening, writing, speaking の四技能の点から、それぞれの項目に関して学生自身に回答してもらった。各技能の調査項目は藤澤・小森（2002）と同様、5 ～ 1 で評定できるようにした（Appendix 「調査用紙」の項目 7 ～ 10 を参照)。

この調査結果を三群別にグラフにしたのが図 2 -a である。対照のために 2001 年度の調査結果も示す（図 2 -b)。ここで縦軸は各群の平均値を示している。2001 年度と 2005 年度の回答平均値を四技能別に t 検定（有意水準 $\alpha = 0.05$）にかけ、listening 以外の技能において二つの平均値には差がないという結果を得た。

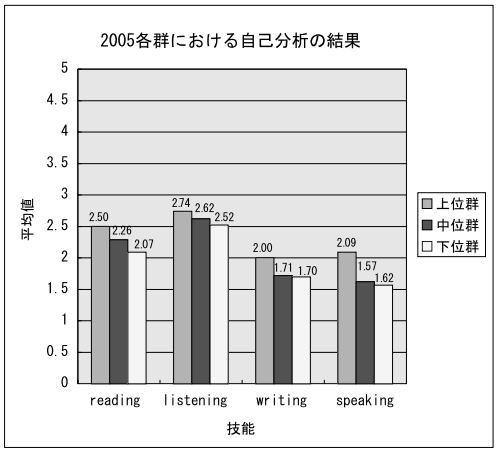

図 2 -a

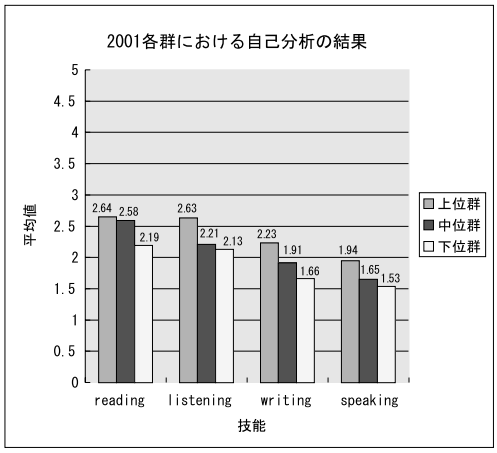

図 2 -b

2005 年度入学生に関してわかることは、まず 2001 年度と同様に平均値がいずれの技能において 5 点満点のうち 3 点を越えていない。第二に上位群・中位群・下位群の学力テストの成績（表 1 ）と自己分析の平均値の間に明らかに対応関係がある。つまり、学生は自分の英語学力についてある程度客観的に自分なりの位置づけを行っているということである。ただ、中位群と下位群の writing と speaking における数値が近接していることには注意しておきたい。中位群の学生の発信面での自信のなさが目立つということになる。第三に 2001 年度と同様に、受信能力である reading と listening に比べて、writing や speaking のような発信能力についての自己分析の

平均値が三群に共通して低い。これは中学・高校時代と変わらず大学入学時までの発信面での継続した自信のなさを示している。ここまでは 2001 年度調査とほぼ同様の傾向である。

では 2001 年度との違いはどうか。reading に関しては、2001 年度と比べて三群ともにその数値が下がっている（中位群、下位群は特に顕著である）。逆に listening に関しては、平均値のみを見る限り、三群ともに数値が顕著に上がっている。writing, speaking に関しては中位群の数値が下がっている。

受信面に関して、listening の平均値が上がり、reading の結果が下がったのは何が原因なのだろうか。従来（2001 年度以前）は reading 重視の英語教育を中学・高校で受けてきた結果、学生は「reading だけはなんとかなる」という気持ちで大学に進学する傾向があった。しかし、特に中位群・下位群で数値が下がったことは、reading に不安を持つ学生が中位群を中心にこの 4 年間のうちにさらに増加したことを示している。また listening の数値が三群ともに上がった（ように見える）のは、t 検定により有意差があると判定されないので、例えば、最近の音声重視の英語教育がいい意味で反映したものだと単純に結論づけることはできない。

また中位群が自分の英語学力に自信を持っていない様子が writing, speaking の数値の低下、および下位群の数値との差があまりないことなどから浮かび上がる。この層の学生に対してどのように働きかけ、自信をつけさせるかが今後の大きな課題になると思われる。

6　学習動機に関して

学習動機の調査項目は、「調査用紙」（Appendix 参照）の項目 27 ～ 60 にあたる。これも藤澤・小森（2002）と同じものを用い、それぞれの項目について自分がどう感じるかを、「強くそう思う（５）」「かなりそう思う（４）」「ふつう（３）」「あまりそう思わない（２）」「全くそうではない（１）」の 5 点法で評定する形で回答するように求めた。その結果が表 2 である。2001 年度と 2005 年度の回答平均値を三群別に t 検定（有意水準 $\alpha = 0.05$）にかけ、平均には差がないという結果を得た。この表の（差）は 2001 年度入学生に対して行った調査で得られた数値との差を示す（たとえば項目 27 に対して今回の全体の平均値は 3.01 で、2001 年度の調査に比べると回答の平均値が 0.34 増加したということである）。

次に上で求めた学習動機の項目に対する回答値をバリマックス回転法による因子分析（主因子法）にかけた。その結果 6 因子を抽出することができた。各因子に付けた名前と選ばれた項目、およびその因子負荷量を表 3 に示す。見やすさのため、値のきわめて小さなものは表示していない。（カッコで示された記号と数値（f1 ～ f5）は 2 節で述べた 2001 年度調査で分類した因子の種類を示すが、これについては 7 節で考察する）

第 1 因子は 8 項目で「英語の読解力」「自由作文力」「聴解力」「発音」「文法力」「会話力」など英語学習における四技能の全ての面で力を伸ばしたい志向が表れており、前回の調査項目とほぼ等しい範疇になったので、そのときに名付けた「お勉強志向因子」をそのまま使用する。

第 2 因子は 9 項目（うち 2 項目は因子負荷量が .400 を下回る）で、「海外旅行をしたい」「「留学したい」「英語を使って海外で働きたい」など、海外との交流を中心として英語を使って海外で

表 2　各項目の回答平均値（M）と標準偏差（SD）

		全体 (N=67)			上位群 (N=23)			中位群 (N=21)			下位群 (N=23)		
		M	(差)	SD	M	(差)	SD	M	(差)	SD	M	(差)	SD
27	本（日本語も英語も可）を読むのがすきだった	3.01	0.34	0.96	3.00	0.26	0.90	2.81	0.10	0.87	3.22	0.72	1.09
28	英語が好きだった	3.90	0.36	0.84	4.09	0.09	0.73	3.81	0.35	0.75	3.78	0.68	1.00
29	外国語そのものに興味があった	3.99	0.30	0.86	4.26	0.32	0.81	3.76	0.25	0.89	3.91	0.35	0.85
30	将来日本で英語を使った仕事に就きたい	4.16	0.17	1.05	3.91	−0.09	1.16	4.24	0.21	0.94	4.35	0.41	1.03
31	将来英語を使って海外で働きたい	3.10	0.14	1.23	3.04	−0.01	1.11	3.05	0.17	1.32	3.22	0.35	1.31
32	中学高校の英語教員になりたい	2.18	0.00	1.21	2.04	−0.30	1.02	2.19	0.13	1.03	2.30	0.24	1.52
33	子どもに英語を教えたい	3.09	0.28	1.25	3.09	0.17	1.28	3.19	0.62	1.08	3.00	0.07	1.41
34	外国人と交流したい	4.22	0.24	0.97	4.22	0.13	1.04	4.38	0.55	0.80	4.09	0.05	1.04
35	文化による違いを勉強したい	3.40	0.21	0.85	3.78	0.18	0.80	3.05	−0.15	0.86	3.35	0.61	0.78
36	在学中に外国の大学に留学をしたい（１年以上）	3.13	0.26	1.23	3.22	−0.07	1.20	3.05	0.52	1.24	3.13	0.33	1.29
37	在学中に短期語学留学をしたい（１ヶ月～３ヶ月）	3.78	0.09	1.19	3.74	0.07	1.21	3.67	0.07	1.11	3.91	0.15	1.28
38	英語の資格を取りたい	4.58	0.01	0.77	4.64	−0.11	0.73	4.52	0.15	0.60	4.57	−0.03	0.95
39	海外旅行をしたい	4.43	−0.22	0.96	4.26	−0.40	1.05	4.29	−0.31	1.10	4.74	0.04	0.62
40	将来発展途上国で活躍したい	2.70	0.15	1.00	2.74	0.17	0.92	2.52	−0.06	0.93	2.83	0.36	1.15
41	将来英語文化圏へ移住したい	2.94	0.10	1.24	2.87	−0.07	1.18	3.05	0.30	1.20	2.91	0.11	1.38
42	海外からの英語の情報を理解したい	3.90	0.22	0.92	4.00	0.03	0.85	3.57	0.09	1.03	4.09	0.55	0.85
43	英語の聴解力を養成したい	4.70	0.06	0.58	4.70	−0.13	0.56	4.67	0.15	0.66	4.74	0.14	0.54
44	自由英作文力を養成したい	4.46	0.27	0.70	4.30	−0.12	0.76	4.57	0.40	0.75	4.52	0.56	0.59
45	英語の会話力を養成したい	4.82	0.10	0.46	4.78	−0.05	0.52	4.81	0.24	0.51	4.87	0.07	0.34
46	英語の発音を改善したい	4.52	0.09	0.73	4.52	0.04	0.79	4.43	0.14	0.81	4.61	0.11	0.58
47	通訳技術を養成したい	3.90	−0.12	0.92	4.17	−0.05	0.83	3.67	−0.13	0.91	3.83	−0.21	0.98
48	翻訳技術を養成したい	3.73	0.07	1.05	4.00	0.37	0.95	3.62	−0.07	1.02	3.57	−0.07	1.16
49	英語の読解力を養成したい	4.39	0.09	0.76	4.43	0.01	0.66	4.40	0.29	0.88	4.35	−0.02	0.78
50	英語の新聞・雑誌を読みたい	4.07	0.24	1.00	4.17	0.06	0.89	4.24	0.52	0.83	3.83	0.16	1.23
51	英語の文法力を養成したい	4.27	0.40	0.80	4.13	0.13	0.92	4.24	0.38	0.70	4.45	0.72	0.74
52	映画が字幕なしで見られるようになりたい	4.52	0.18	0.75	4.30	−0.15	0.82	4.57	0.29	0.75	4.70	0.43	0.63
53	英語によるスピーチができるようになりたい	4.22	0.22	0.81	4.30	0.28	0.82	4.10	0.12	0.89	4.26	0.23	0.75
54	教養としての英語力の養成が必要である	4.15	−0.06	0.82	4.17	−0.17	0.72	4.10	0.07	0.77	4.17	−0.03	0.98
55	文化・歴史理解に対して英語が必要である	3.43	0.14	0.87	3.57	0.08	0.73	3.43	0.20	1.03	3.30	0.20	0.88
56	日本を海外に紹介するのに英語が必要である	4.09	0.29	0.92	4.04	0.13	0.82	4.19	0.33	0.93	4.04	0.51	1.02
57	海外の文学や芸術の理解には英語が必要である	3.84	0.36	0.93	3.96	0.50	0.98	3.71	0.11	0.90	3.83	0.53	0.94
58	自国の文化・言語の理解には英語が必要である	3.37	0.10	1.07	3.39	0.19	0.94	3.29	−0.06	0.78	3.43	0.17	1.41
59	異文化理解のためには英語が必要である	4.12	0.37	0.86	4.17	0.26	0.83	4.05	0.33	0.97	4.13	0.53	0.81
60	英米人の思想や宗教を理解するのに英語が必要である	3.70	0.19	0.92	3.70	0.01	0.93	3.67	0.07	0.97	3.74	0.51	0.92

行動するという志向を表すもので「海外交流志向因子」と名付ける。これも 2001 年度の調査とほぼ一致するので同一の命名をした。

第 3 因子は 6 項目で自国あるいは外国の文化・芸術・歴史についての理解の必要性を述べた項目が集まっており、「教養志向因子」と名付ける。これも 2001 年度の調査とほぼ一致するので同一の命名をしている。

第 4 因子は 4 項目（うち 2 項目で因子負荷量が .400 を下回っている）で、「翻訳技術」「通訳技術」といった英語学習の基礎を固めてさらに上の段階を目指すものが中心になるので「上級技能志向因子」と名付ける。2001 年度の調査では「お勉強志向因子」の中に含まれていたものが分離したことになる。

第 5 因子は 5 項目（うち 1 項目で因子負荷量が .400 を下回っている）で、「英語の資格を取りたい」「子供に英語を教えたい」「中学高校の英語教員になりたい」「将来日本で英語を使った仕事に就きたい」など、教職を中心とした資格志向が見えているので「資格志向因子」と名付ける。2001 年度の調査では「教師志向因子」という独立した因子が摘出されたが、今回はもう少し広く「資格志向」で一つの因子になった。

表 3　英語学習動機に関する因子分析結果

（Kaiser の正規化を伴うバリマックス回転後の因子負荷量）

項　　目						
F1：お勉強志向因子						
49 英語の読解力を養成したい (f3)	0.789					
44 自由英作文力を養成したい (f3)	0.757					
43 英語の聴解力を養成したい (f4)	0.744					
46 英語の発音を改善したい (f4)	0.683					
53 英語によるスピーチができるようになりたい (f3)	0.62					
51 英語の文法力を養成したい (f3)	0.604					
45 英語の会話力を養成したい (f4)	0.575					
52 映画が字幕なしで見られるようになりたい (f2)	0.533					
F2：海外交流志向因子						
31 将来英語を使って海外で働きたい (f2)		0.785				
36 在学中に外国の大学に留学をしたい（１年以上）(f2)		0.737				
41 将来英語文化圏へ移住したい (f2)		0.698				
37 在学中に短期語学留学をしたい（１ヶ月～３ヶ月）(f2)		0.663				
40 将来発展途上国で活躍したい (f2)		0.611				
34 外国人と交流したい (f2)		0.547				
39 海外旅行をしたい (f2)		0.514				
42 海外からの英語の情報を理解したい (f4)		0.397				
50 英語の新聞・雑誌を読みたい (f2)		0.338				
F3：教養志向因子						
59 異文化理解のためには英語が必要である (f1)			0.704			
56 日本を海外に紹介するのに英語が必要である (f1)			0.614			
57 海外の文学や芸術の理解には英語が必要である (f1)			0.597			
58 自国の文化・言語の理解には英語が必要である (f1)			0.587			
55 文化・歴史理解に対して英語が必要である (f1)			0.511			
60 英米人の思想や宗教を理解するのに英語が必要である (f1)			0.433			
F4：上級技能志向因子						
48 翻訳技術を養成したい (f3)				0.805		
47 通訳技術を養成したい (f3)				0.682		
35 文化による違いを勉強したい (f1)				0.349		
27 本（日本語も英語も可）を読むのがすきだった (f1)				0.165		
F5：資格志向因子						
33 子どもに英語を教えたい (f5)					0.683	
38 英語の資格を取りたい (f3)					0.628	
32 中学高校の英語教員になりたい (f5)					0.539	
30 将来日本で英語を使った仕事に就きたい (f4)					0.403	
54 教養としての英語力の養成が必要である (f3)					0.38	
F6：興味志向因子						
28 英語が好きだった (f4)						0.592
29 外国語そのものに興味があった (f4)						0.563
Eigenvalue	8.036	2.698	2.405	1.721	1.378	1.229
Variance(%)	23.635	7.935	7.074	5.062	4.054	3.615
Cumulative Variance(%)	23.635	31.57	38.644	43.706	47.760	51.375

第 6 因子は 2 項目で、「英語が好きだった」「外国語そのものに興味があった」という外国語としての英語に対する興味をもつことでまとまりを得たので、これを「興味志向因子」と名付ける。

次に、これら 6 因子について英語学力との関連を考察する上で、上位群・中位群・下位群のグループごとに因子別の回答平均値を算出した（表 4）。ここでいう回答平均値とは、各因子に有効であるとして選ばれた項目に対する各群の評定（5 ～ 1）の平均値のことである。

表 4　三群の因子別回答平均値

	F1	F2	F3	F4	F5	F6
上位群	4.43	3.58	3.80	3.74	3.53	4.17
中位群	4.45	3.53	3.72	3.29	3.65	3.79
下位群	4.54	3.64	3.75	3.75	3.68	3.85
全　体	4.47	3.59	3.76	3.51	3.62	3.94

7　考察

この節では 2001 年度の調査結果と比較しながら、2005 年度の入学生に関してどのような傾向が見られるかを考察する。

(1) 各項目の回答平均値（M）と標準偏差（SD）に関して

今回の調査で最も特徴的なことは、各質問項目を通して三群のうち下位群の平均値が最も高くなった項目が多いことで、全体の項目の約半数にあたる 16 項目で最高値が出た。(ちなみに 2001 年度の調査で下位群の数値が最も高かったのは 4 項目（「子供に英語を教えたい」「在学中に短期語学留学をしたい」「海外旅行をしたい」「英語の発音を改善したい」）に過ぎなかった。)

またこれと付随して、中位群と下位群での数値の逆転現象を見せているのが、上の 16 項目以外に 7 項目ある。つまり全体 34 項目のうち 23 項目で下位群の数値が中位群より高い結果になったということである（2001 年度は 34 項目中 17 項目)。ここから言えるのは、下位群の動機が強まったということであり、裏を返せば下位群の自分の英語学力に対する不安がここに表れたと見ることもできる。

表 2 には、各項目の三群の回答平均値の結果とともに、2001 年度との比較した数値の増減を示してある。このうち 0.3 以上の増減した項目に着目してさらに考えてみたい。

まず全体平均で 0.3 以上増加したところでは、「本を読むのが好きだった」(＋ 0.34)、「英語が好きだった」(＋ 0.36）について下位群の数値が特に増加している。これは次の「外国語そのものに興味があった」（＋ 0.30)、「海外の文学や芸術の理解に英語が必要である」（＋ 0.36)、「異文化理解のためには英語が必要である」(＋ 0.37）の増加と合わせて英米文学科の学生としては好ましい傾向である。また「英語の文法力を養成したい」(＋ 0.40）も下位群の数値が大幅に高くなっている。下位群の学生が自分の文法力が弱いと自覚している現れだと思われる。

さて、全体的には数値が増加傾向にある中で、減少した項目にも注意しておきたい。全体的に見て最も大きく減少した項目は「海外旅行をしたい」（－ 0.2）であった。これは上位群ほどこの傾向にあるもので、2001 年の米国での大規模テロ事件以降の世界情勢の反映であると言えよう。

次に減少が大きいものは「通訳技術を養成したい」(－0.12）で、下位群ほどその数字が大きくなる。これも英語学力に関しての自己認識の程度と比例しているといえる。他に減少が目立つのは、「中学高校の英語教員になりたい」の上位群の数値（－0.30）で、この項目での中・下位群の数値が増加したのと対照をなす。(教員離れの傾向は2001年度の調査でも現れていて、調査項目の中で最低値であった。）特に上位群の数値だけが下がったことは、資格として英語教員の免許が取れることを一つの「売り」にしている学科としては非常に気がかりである。一方、下位群の意欲は買えるが、教員になれるだけの英語学力をどのように補強するかは学科として大きな課題である。

さらに群別の傾向として、上位群の2001年度比の学習意欲の減少が顕著で、上位群だけが減少している項目が上で挙げた以外に8項目もある。中位群だけが減少傾向にある項目としては、「文化による違いを勉強したい」（－0.15)、「将来発展途上国で活躍したい」（－0.06)、「自国の文化・言語の理解には英語が必要である」（－0.06）の3項目である。上位群の学生には、学習動機を方向づけ強化するために大学4年間の目標を持たせるなど、レベルにあった適切な指導が必要になるだろう。

(2) 各因子に関して

先にも述べたように、2005年度の調査をもとに因子分析を行った結果6因子を抽出した（表3)。この表の中で各項目の終わりにカッコで示したf1～f5の数字は、2001年度の調査で得た因子分析の結果を示している。その内容は「f1：教養志向因子」「f2：海外交流志向因子」「f3：お勉強志向因子」「f4：耳口志向因子」「f5：教師志向因子」であった。

まず、この推移から何が読みとれるのか。前回の調査で寄与率の最も高かった「f1：教養志向因子」が今回はF3に下がった。これに対して前回はf3であった「お勉強志向因子」が寄与率の最も多いF1になったことが大きな変化である。その因子を構成する項目を見ればよく分かるが、英語の四技能をまんべんなく強化したいという傾向が最も強くなった。それは一定の英語学力を前提として以前の英米文学科学生がもっていた教養的要素を身につけたいという志向に対して、2005年度入学生は、学力に自信がなく英語運用能力そのものを強化したい要求が強まったということである。

また今回のF2、F3因子は前回のf2、f1因子とほぼ同様の構成である。つまり「F2：海外交流志向因子」と「F3：教養志向因子」はほぼ変わっていない。さらに前回の「f1：教養志向因子」と「f3：お勉強志向因子」から今回の「F4：上級技能志向因子」が派生したことになる。つまり四技能を習得することと上級技能を求めることが区別され、別物として意識されてきたということではないだろうか。

前回の調査では独立していた「f5:教師志向因子」が今回はF5として他の資格習得志向と関連して一つの「資格志向因子」として表れている。英語学力そのものの強化と資格志向が分離していることには注目する必要がある。つまり普通は資格を得るために英語学力を付けると考えがちなのであるが、彼らから見て、英語力強化することは単純に資格とはつながっていないのである。また前回「f4：耳口志向因子」の中に取り込まれていた項目「英語が好きだった」、「外国語その

ものに興味があった」が、「F6：興味志向因子」として独立して得られたことも注目すべきである。

次に、表 4 にあげた「各因子における群別の回答平均値」に関して 2001 年度と比較すると、前回は 5 因子全てにおいて上位群がもっとも高い数値を示したのに対して、今回は F1、F2、F5 において下位群が最も高い数値を示している。また全ての因子において中位群よりも下位群の方が高い数値である。英語学力は相対的には上位だが動機の点で低迷する上位群、英語学力はかなりの補強を要するが（入学時の）動機は最も高い下位群、学力・動機ともに大幅な補強を要する中位群の学生の姿がここにも現れている。

8　まとめと展望

本稿の目的は、入学生の英語学習動機が変化していることを前提に、特に実践面での重要性を感じている学生が増えたかどうかを、統計により客観的に分析することであった。この点を最後に検討しておきたい。

因子分析の結果として英語の四技能をすべて伸ばしたいという因子が最も寄与率の高いものとして検出された。海外交流志向が依然と変わらず高いことと合わせて考えると、上の仮説はある程度裏付けられると思われる。ただし、上級技能志向や資格志向にそれほど重きが置かれていないことから、彼らが自分たちのめざす英語技能がそれほど高度でなくてもよいと考えている可能性が残る。つまり完全に実践志向になり切れていない傾向が見て取れる。このことは下位群に特に顕著で、ある程度の英語力を身につけたいとは思うものの、その意欲が何に結びつくのかがはっきりしない。入学時の学習動機の高さは評価できるが、その気持ちをどこまで持続して実際に英語学力を伸ばし卒業後の進路につなぐかは大学での学習次第である。

英米文学科に課された大きな問題の一つは、学習動機全体を通して下位群の数値が高いことを、入学後の実際の英語学習とうまく結びつけることである。このことは英米文学科にとどまらず、大学全体の、特に 1 年次教育におけるカリキュラム、教授法、教育環境の強化・整備などと密接に関連する。さらに、実践志向を持つ学生に対して、英語の運用能力を高めるとともに、その背後にある教養の重要性を見直してもらえるような環境作りも同時に必要であろう。

今回の調査で、英米文学科志望の学生の実践志向が明らかになったといえるが、2006 年度から学力低下を懸念された新学習指導要領で学んだ学生が進学してくると、この傾向はさらに進むのであろうか。継続した調査の必要性が残されている。

【注】

1　「英語能力判定テスト」はテスト A ～テスト D まで 4 種類あり、今回実施したテスト B は英検 2 級～ 3 級レベル。問題は「語彙・熟語・文法」(30 題)、「文章構成」(5 題)、「読解」(15 題)、「リスニング」(30 題）の合計 80 題で，筆記 35 分、リスニング 25 分で行う （http://www.eiken.or.jp/placement/）

2　SPSS の統計処理は大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科の永野光朗教授の協力を得た。

2005年度入学生アンケート（４月）

このアンケートはあなたのこれから４年間の大学生活を進めていく上で大切な基礎資料となります。またこれに基づいて個人面談を進める予定ですので、できる限り正直にお答え下さい。そしてカリキュラム、学習動機など授業研究に対しての基礎データにも使わせていただきたいので、ご了解の上ご協力下さい。

A　あなた自身の基礎データについて（空欄に記述して下さい）
1　学籍番号　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
2　名前（ふりがな）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（　　）
3　出身高校（所在地）＿＿＿＿＿＿＿高校（　　）
4　入学形態（あてはまるものに○をつけて下さい）
　　1 特別推薦Ａ（外部）　2 特別推薦Ｂ（内部）　3 一般推薦Ａ（11月）　4 一般推薦Ｂ（12月）
　　5 一般入試Ａ（１月）　6 一般入試Ｂ（２月）　7 一般入試Ｃ（３月）　8 センター入試前期
　　9 センター入試後期
5　留学経験（海外経験　何年生でどの国にどのくらいの期間行ったか）
6　英語の検定（英検、TOEIC, TOEFL など）現在での資格（級やスコアを具体的に書いてください）

B　現在の英語力についての自己認識（得意度）（あてはまるものに○をつけて下さい）
7　reading ～自分の読む力の自己評価（辞書なしで、80%以上理解できる）
　　1　初歩的な内容の英文（中２）
　　2　初級程度の内容の英文（中3，高１）（教科書英語。レベル）
　　3　中級程度の内容の英文（高２・３）（教科書英語「レベル）
　　4　入試に出題される英文　（教科書英語 Reading レベル）
　　5　上級程度の内容の英文（英字新聞雑誌などの論説）
8　listening ～英語を聴いて理解する力の自己評価（80%ぐらい理解できる）
　　1　ほとんどできない　　2　簡単な挨拶程度　　3　単純な内容の会話
　　4　複雑な内容の会話　　5　ニュース、映画やドラマの中で話される会話
9　writing ～自分の意志や考えを英語で書き表すことへの自己評価
　　1　ほとんどできない（10%まで）　　2　わずかだけできる（30%まで）
　　3　ある程度できる（60%まで）　　4　かなりの程度できる（80%まで）
　　5　ほとんど問題なくできる（81%以上）
10　speaking ～自分の意見や考えを英語で話せることに対しての自己評価
　　1　ほとんどできない（10%まで）　　2　わずかだけできる（30%まで）
　　3　ある程度できる（60%まで）　　4　かなりの程度できる（80%まで）
　　5　ほとんど問題なくできる（81%以上）

C　学習履歴（一般的）（英語にこだわらない）（空欄に記述して下さい）
11　中学時代の自宅での１日の勉強時間（平均、特にテスト前は）
12　中学時代の勉強方法（塾、家庭教師なども含む）
13　高校時代の自宅での１日の勉強時間（平均、特にテスト前は）
14　高校時代の勉強方法（塾、家庭教師なども含む）

D　英語学習について（自由に記述して下さい）
15　中学時代の英語の授業（どんな授業でしたか？　文法中心、オーラル中心、和訳中心など）
16　ネイティブ・スピーカーの授業（何年生で週何時間ありましたか）
17　中学時代の英語の授業で特に印象に残っていること
18　高校時代の英語の授業（どんな授業でしたか？　文法中心、オーラル中心、和訳中心など）
19　ネイティブ・スピーカーの授業（何年生で週何時間ありましたか）
20　文法の時間がありましたか（何年生で週何時間ありましたか）
21　高校時代に使用した辞書（たとえば「ジーニアス英和辞典」など）、電子辞書も可
22　高校時代の英語の授業で特に印象に残っていること
23　英会話学校に行った経験（過去、現在）がありますか（いつごろ、どのくらいの期間など）
24　テレビ・ラジオ講座の利用して英語の勉強をしたことはありますか。どのようなものをどのくらい利用しましたか（たとえば NHK テレビ「とっさの一言」を３ヶ月見たなど）

25　英単語集に関して（何を、どのように、勉強したかあるいはしていないか）

E　留学に関して（あてはまるものに○をしてください）
26－1　在学中に留学したいと考えていますか　　はい　いいえ
26－2　樟蔭のプログラムを利用したいですか　　はい　いいえ
26－3　26－2で「はい」と答えた人に、どのプログラムですか
短期（春夏休み4（6）週間）（ロンドン、スライゴー、オークランド、フレズノ）
中期（2年後期の4ヶ月）（ケント）
長期（1年）（フレズノ）

2005年度入学生アンケート（4月）

学籍番号：＿＿＿＿＿＿　クラス：＿＿＿　名前：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ここからは、「5：強くそう思う」「4：かなりそう思う」「3：ふつう」「2：あまりそう思わない」「1：全くそうではない」という数字で回答して下さい。

F　英米文学科を志望した動機（1～5）
27　本（日本語も英語も可）を読むのがすきだった　＿＿＿
28　英語が好きだった　＿＿＿
29　外国語そのものに興味があった　＿＿＿
30　将来日本で英語を使った仕事に就きたい　＿＿＿
31　将来英語を使って海外で働きたい　＿＿＿
32　中学高校の英語教員になりたい　＿＿＿
33　子どもに英語を教えたい　＿＿＿
34　外国人と交流したい　＿＿＿
35　文化による違いを勉強したい　＿＿＿
36　在学中に外国の大学に留学をしたい（1年以上）　＿＿＿
37　在学中に短期語学留学をしたい（1ヶ月～3ヶ月）　＿＿＿
38　英語の資格を取りたい　＿＿＿
39　海外旅行をしたい　＿＿＿
40　将来発展途上国で活躍したい　＿＿＿
41　将来英語文化圏へ移住したい　＿＿＿

G　在学中にどのような英語の学力を身につけたいか（運用技能）（1～5）
42　海外からの英語の情報を理解したい　＿＿＿
43　英語の聴解力を養成したい　＿＿＿
44　自由英作文力を養成したい　＿＿＿
45　英語の会話力を養成したい　＿＿＿
46　英語の発音を改善したい　＿＿＿
47　通訳技術を養成したい　＿＿＿
48　翻訳技術を養成したい　＿＿＿
49　英語の読解力を養成したい　＿＿＿
50　英語の新聞・雑誌を読みたい　＿＿＿
51　英語の文法力を養成したい　＿＿＿
52　映画が字幕なしで見られるようになりたい　＿＿＿
53　英語によるスピーチができるようになりたい　＿＿＿

H　英語の必要度認識（1～5）
54　教養としての英語力の養成が必要である　＿＿＿
55　文化・歴史理解に対して英語が必要である　＿＿＿
56　日本を海外に紹介するのに英語が必要である　＿＿＿
57　海外の文学や芸術の理解には英語が必要である　＿＿＿
58　自国の文化・言語の理解には英語が必要である　＿＿＿
59　異文化理解のためには英語が必要である　＿＿＿
60　英米人の思想や宗教を理解するのに英語が必要である　＿＿＿

【参考文献】

Brown, James Dean. 2001. *Using Surveys in Language Programs.* Cambridge University Press.

千葉克裕 . 2003. 「2002 年度英語学科入学生の英語学習に関する調査報告：英語学習の動機付け研究における一考察」. *Bulletin of Sakura no Seibo Junior College.* 27. 47-74.

藤澤良行・小森道彦 . 2002. 「外国語学習に関する自己分析と動機の研究―学力別観点からの英米文学科新入生の実像」.『大阪樟蔭女子大学論集』39. 23-35.

Gardner, Robert C. and Wallace E. Lambert. 1972. *Attitudes and Motivation in Second Language Learning*. Rowley, MA: Newbury House Publishers.

堀野緑・市川伸一 . 1997.「高校生の英語学習における学習動機と学習方略」.『教育心理学研究』45. 140-147.

市川伸一. 1995. 『学習と教育の心理学』. 岩波書店.

清川英男. 1990. 『英語教育研究入門―データに基づく研究の進め方』. 大修館書店.

清川英男・濱岡美郎・鈴木純子 . 2003. 『英語教師のための Excel 活用法』. 大修館書店 .

前田哲朗・山森光陽（編著）. 2004. 『英語教師のための教育データ分析入門―授業が変わるテスト・評価・研究』. 大修館書店.

中田賀之. 1999.『言語学習モティベーション―理論と実践』. 東京：リーベル出版 .

_____. 2001. 「英語学習動機づけ研究：量的データと質的データ融合に向けての試み－大学１年生の意識調査を用いて」.『社会文化研究所紀要（九州国際大学社会文化研究所）』 48. 117-138.

Seliger, Herbert W. and Elana Shohamy. 1989. *Second Language Research Methods*. Oxford University Press. （邦訳：土屋武久他（訳）.『外国語リサーチマニュアル』. 大修館書店. 2001.）

島村恭輔 . 2001.「日本人大学生の英語学習動機について:因子分析による予備調査とその考察」.『愛知文教大学論叢』4. 191-218.

上田敦子 . 2004. 「ケーススタディ　大学１年生の英語に対する学習動機」. 『コミュニケーション学科論集（茨城大学人文学部）』16. 107-123.

柳田恵美子・荒井貴和 . 2004.「日本人大学生の英語学習動機の変化―1988年度と2000年度の学生の比較」.『常磐国際紀要（常盤大学国際学部）』8. 39-51.

八島智子 . 2004.『外国語コミュニケーションの情意と動機―研究と教育の視点』. 関西大学出版部 .

吉田広毅・中山晃・長谷川奈津 . 2002. 「大学生の英語学習動機に関する分析的研究」. 『常葉学園大学研究紀要　外国学部』19. 299-308.